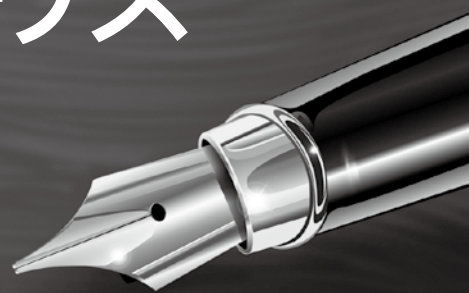




# 大地震と トレーラーハウス



国立研究開発法人  
防災科学技術研究所 特別研究員

島崎 敢

熊本で震度7の大きな地震が起きました。それも2回も。震度は最大が7でそれ以上はありません。つまり考えられる最大の地震が立て続けに2回来たわけです。震源に近い益城町では、古い木造家屋がほとんど倒壊しました。新しい家や鉄筋コンクリートの建物は原型をとどめていますが、よく見るとその多くが重要な部分に亀裂が入っていたり、隣の家が寄りかかっていたりして、危険なため中に入ることができません。つまり、街の中にあるほとんどの建物が使えない状態です。

こうなると避難所は人で溢れかえります。家が倒壊してしまった人はもちろん、大きな地震のあとは繰り返す余震が来るので、自宅が無事でも次の余震での倒壊を心配している人も避難所を訪れます。さらに熊本地震では避難所に指定されていた建物も壊れて使えなくなった例もあり、残った避難所にさらに人が集中することになりました。



りません。  
このように、避難所はとても過酷でストレスフルな環境です。避難所の環境が原因と見られる死亡例も少なくありません。そこで、自宅に戻れない被災者を避難所から連れ出すために用意されるのが仮設住宅です。避難所生活は短い方がよいので、仮設住宅はなるべく早く提供する必要があります。しかし「仮設」とは言っても、建設には一定の時間がかかります。その地域の建設需要が一気に高まり人手不足に陥るのに、地元の建設業者も被災していますから、100%の力が出せません。外から業者を入れるにしても、宿泊施設が被災していれば、作業する人が泊まる場所がありません。つまり仮設住宅の建設は前途多難なわけですが、こういった問題を一気に解決するアイデアとして、熊本地震ではトレーラー

ハウスを使う試みが一部ではじまっています。

トレーラーハウスはキャンピングカーと家の中間的な存在で、車よりも家に近い外見です。「車輪つきの家」と言えばイメージが湧くでしょうか。エンジンはついておらず、トラクターで引っ張って移動します。キャンピングカーのようにちよっと出かけて帰ってくるのではなく、前後に誘導車をつけて移動し、しばらくは動かさずに使うことを想定しています。ワンルームマンションの一式程度から小ぶりの一軒家程度のもので色々なサイズがあります。エアコンやユニットバス、システムキッチンなどを予め据え付けたものもあります。移動

イラスト・本田敦子



の後、水平になるようにとりあえず設置するだけなら所要時間は1〜2時間程度、ここに電気や上下水道などのライフラインを接続する必要がありますが、停電していても発電機を繋げばさしあたりは給電できるし、プロパンガスで火も使うことができます。上下水道は接続工が必要ですが、逆にきつちり工事をすれば、普通の家と同じように水周りが使えます。トレーラーハウスは引っ張ってくるだけで設置できるので、物資や人手が不足している被災地の外で建設ができます。それどころか、災害が起きる前から作っておくことができるので、災害が起きてから建設を始める仮設住宅に比べて圧倒的に早く提供できます。そして使い終わった後の撤去も簡単、どこかに保管しておけば次の災害でも使うことができます。また、仮設住宅の建設用地に使用期限がある場合も簡単に移設できますし、仮設住宅の住人が減り始める復興後期に人が住んでいる仮設住宅だけを一箇所にまとめるのも容易です。値段はピンキリですが「高級車」でなければ仮設住宅の建設と撤去を合わせた費用とそれほど変わらないそうです。トレーラーハウスにはもう一つ大きなメリットがあります。一見すると普通の家のように見えますが、道路を走る前提で作られているので、揺れに対してとても頑強です。つまり、耐震性が極めて高く、余震が続く大震災直後でも安心して住めるのです。

良いことづくめのトレーラーハウス、海外ではまとまった数を「備蓄」しておき、被災地に貨物列車で一気に運びこんだ事例もあるようです。家庭で水や食料を備蓄しておくように、国や自治体が備蓄しておく品目にトレーラーハウスを加えても良いのかもしれないね。(しまぎき・かん)

